



Data	2025-12
監督・プロデューサー：	フランクリン・J・シャフナー
プロデューサー：	ロベール・ドルフマン
脚本：	ダルトン・トランボ、ロレンツォ・センブリ・ジュニア
原作：	アンリ・シャリエール『パピヨン』
出演：	スティーヴ・マックイーン／ダスティン・ホフマン／ロバート・デマン／ウッドロー・パーフリー

👁️👁️ みどころ

私が青春時代を過ごした 1960 年代後半から 70 年代は素晴らしい名作・大作映画が多かった。その時代を彩った名優も多い。スティーヴ・マックイーンやダスティン・ホフマンはタイプこそ正反対だが、間違いなくその一員だ。そんな 2 人の「パディもの」の最高峰、そして誰よりも「脱獄モノ」が似合う男、スティーヴ・マックイーンの「脱獄モノの最高峰」が本作だ。

何よりも驚くのは、本作は実話に基づく物語だということ。つまり、現実に死刑判決を受け監獄に入れられた男アンリ・シャリエールの体験談が小説になり、また映画になったわけだ。

マックイーンはガンマン姿が最高に素敵なアクションスターだが、同時に寡黙で律儀で情に熱い男の中の男。そう聞くと、日本にもいたいた、そんな男が。それは、『網走番外地』シリーズをはじめとする任侠ヤクザ路線で一時代を築いた俳優・高倉健だが、あなたはスティーヴ・マックイーンと高倉健の共通性をどう考える？

「昭和は遠くなりにはけり」となった今、「テアトル・クラシックス ACT.5」で 50 年前の名作を再び大スクリーンで鑑賞できたことに感謝！

■□■あの名作が「テアトル・クラシックス ACT.5」で公開！■□■

「テアトル・クラシックス」とは、「誰もが知る過去の名作や、あまり知られることなかった隠れた傑作を、東京テアトルがセレクトするスペシャル・プログラム」のこと。そこでは、「往年の映画ファンには再びスクリーンで名作を鑑賞する感動と高い満足、これまで名作に触れてこなかった若い世代にはクラシック映画の素晴らしさをお届けします。洋画メジャースタジオのアーカイブを数多く管理する Park Circus 社の提供で、テアトル

独自の目線で過去の名作から作品を選定。作品ジャンルや監督、俳優など様々なカテゴリーで特集を企画、年2回（予定）全国で上映します。」と謳われている。しかして、ステイヴ・マッキーンとダスティン・ホフマンが共演した伝説的映画『パピヨン』（73 年）が「日本公開 50 周年を記念」し、「テアトル・クラシックス ACT.5」として、2025 年 1 月 31 日から公開されることに。

同作が公開された 1973 年は、私が弁護士登録した前年。したがって、映画鑑賞どころではなかったはずだが、なぜか私は本作のストーリーも、美しいテーマ曲もよく知っている。一体いつ観たのだろうか？それを探しても仕方ないので、50 年ぶりにあの時の感動を再度味わうべく映画館へ。

■□■原作は脱獄成功者！どこで市民権を？どこで執筆を？■□■

映画のネタとして選ばれる原作は多種多様。しかし、現実には有罪判決を受けて収監された受刑者が脱獄を成功させたうえ、自らの脱獄体験を描いた小説が映画のネタとして使われたのは、きっと本作が初めてかつ唯一のものだろう。その原作者は、脱獄を成功させた後にベネズエラ市民権を獲得したというアンリ・シャリエールだが、本作が大ヒットしなければそんな原作者を知っている人は誰一人いなかったはずだ。

1931 年といえは 9 月 18 日に起きた「満州事変」が日本史では有名だが、その 1931 年の 10 月 29 日、パリの重罪裁判所で殺人の罪に問われながらも、無罪を訴える 25 歳の男に対して、無期懲役の判決が言い渡されたそう。その男の名は、アンリ・シャリエール。彼の胸に刻まれた蝶の入れ墨から「パピヨン」と呼ばれていたヤクザ者だ。

他方、フランス人の女優作家・アルベルティヌ・サラザンが、1965 年に、未成年売春罪で投獄された少女が刑務所を脱獄し、真の愛に目覚めていく姿を描いた小説『アンヌの逃走』が、フランスでベストセラーになり、映画化もされたそう。この成功に感化されたのが、当時ベネズエラで生活していたアンリ・シャリエール。アルベルティヌ・サラザンの体験よりも自分の方が上だと感じた彼は、13 冊分のノートに一気に体験談を書き上げて出版社に売り込み、1969 年 6 月に『パピヨン』と題して刊行したところ、目論見通りフランスで 100 万部、アメリカで 250 万部、世界中で 1000 万部以上を売り上げるベストセラーになったそう。その内容に異議を唱える識者も現れたが、アンリ・シャリエールは「俺が書いたものの 75%が実際に体験したことだ。勘弁しなよ、残り（25%）は純粋なる記憶違いなんだから」と軽やかに応えたため、小説の真偽はさておき、彼の体験記は映画界からも熱い視線が集まることになったそう。

■□■企画は？監督は？脚本は？■□■

本作のパンフレットは 1500 円と高価だが、大判で立派。写真も豊富で、内容も充実している。50 年の時を経て 1973 年の名作を振り返るパンフレットだから、いかようにでも充実できるのは当然だが、まずは①INTRODUCTION、②CAST、③STAFF、④PRODUCTION NOTES に注目！PRODUCTION NOTES を読めば、アンリ・シャリエ

ールの原作に映画界から熱い注目が集まった結果、フランスの映画プロデューサーのロベール・ドルフマンがその映画化権を 60 万ドルで買い取った。それによって映画化の企画が進み、スティーヴ・マックイーンの主役への起用が決まったが、ダスティン・ホフマンの起用に至るには、脚本家の起用とも絡んで、さまざまな紆余曲折があったらしい。そこですごいのは、『トランボ ハリウッドに最も嫌われた男』(15 年)『シネマ 38』123 頁)で一躍有名な脚本家になったダルトン・トランボが本作の脚本を書いたことだが、そこに至るまでの脚本家の再三の交代劇は興味深い。本作は 1356 万ドルの製作費で 5326.7 万ドルの興行収入と 13 億円の配給収入 (Wikipedia) を上げる大成功だったが、そんな脚本作業だけでも 50 万ドル以上を費やしたようだ。

また、トランボは 1976 年に死亡したが、トランボ自身が書いたセリフで、完成品に残っていたのは最後の「クソ野郎ども、俺はまだ生きているぞ!」の叫びだけだったというからすごい。さらに、本作の撮影を巡るパンフレットの記事は興味深いいし、本作の映画音楽についての記述も興味深い。私は淀川長治の「世界映画音楽大全集」の CD10 枚を iPad に入力して、毎晩、眠るときに聴いているが、『パピヨン』の旋律の美しさは中でも際立っている。50 年後の今、そんな名作を「テアトル・クラシックス ACT.5」で鑑賞できたことに感謝なら、こんな詳しい解説をしてくれたパンフレットに出会えたことにも感謝!

■□主演は?共演は?「バディもの」の最高傑作に注目!■□

本作が大ヒットした要因はいろいろあるが、その最大のものは、当時ハリウッドで絶大な人気を博していた“アクションスター”スティーヴ・マックイーンをパピヨン役に起用したことと、国債偽造の罪で刑を受けていたドガ役に、『卒業』(67 年)で一躍脚光を浴びたダスティン・ホフマンを起用したことだ。「バディもの」は数多いが、この 2 人の共演は全く意外な組み合わせで、最高のものだ。もっとも、当初の企画では全く名前の出ていなかったダスティン・ホフマンをドガ役で起用することになったため、脚本が大幅に変更された上、脚本家まで交代され、ストーリーの構成も大きく変更されたそうだから大変だ。脚本の“リライト”が進むにつれて、最後まで書き残されたのが、原作では前半部に登場してくる先住民村のシークエンスだけだったそうだが、本作のそのシークエンスは如何に?そこに登場するのはスティーヴ・マックイーンだけで、ダスティン・ホフマンは登場しない。しかし 2 時間 31 分の長尺となった本作のラストは、再び (三度?四度?) スティーヴ・マックイーンとダスティン・ホフマンの 2 人だけの世界となり、そしてパピヨンの脱出成功劇になるので、それに注目!

私は 2001 年から年間 200 本以上の映画を観て映画評論家業を始め、かつ『SHOW! HEY シネマルーム』の出版を始めたが、どちらかというと、そこから約 20 年間で印象に残っている映画より、1960~70 年代に観た本作を含むさまざまな名作の方が印象に残っている。それは一体なぜ?その要因もいろいろだが、とにかくそんな素晴らしい名作に「テアトル・クラシックス ACT.5」で再び出会えたことに感謝!

なお、そんな同作を、本作とは違う2人の俳優で45年ぶりに復活させたのが、マイケル・ノア監督の『パピヨン』(17年)、『シネマ45』127頁)だった。私は同作の評論で、「原作を生かしつつ、『トランボ ハリウッドに最も嫌われた男』(15年)で一躍有名になったダルトン・トランボが脚本を書いた旧作を上回るのは至難のワザ。」と書いた。誰もがそう思ったはずだが、同作も素晴らしかった。したがって、50年ぶりに公開された本作を再鑑賞するについては、マイケル・ノア版との対比も不可欠だ。

■□■あなたにとっての「脱獄モノ」の最高傑作は？■□■

本作のパンフレットが充実していることは前述したが、そこには、

- ①「各国ポスターから考察する超大作『パピヨン』の宣伝手法」井上由一氏(シネマサクション)
 - ②「“マックィーン世代”から、現世代へ伝えたい！ 不屈の男“マック兄ィ”は最高にカッコ良かったんだぜ！」秋本鉄次氏(映画評論家)
 - ③「名優ダスティン・ホフマンと『パピヨン』」渡辺祥子氏(映画評論家)
 - ④「実録『パピヨン』～アンリ・シャリエールの闘い～」賀来タクト氏(映画&音楽評論家)
 - ⑤「語られざる映画作家フランクリン・J・シャフナー」賀来タクト氏(映画&音楽評論家)
 - ⑥「ゴールドスミスという巨人を育んだもの」賀来タクト氏(映画&音楽評論家)
 - ⑦「『パピヨン』の音楽設計」上野耕路氏(作曲家)
 - ⑧「『パピヨン』とその時代」金澤誠氏(映画評論家)
 - ⑨「脱獄映画の系譜」金澤誠氏(映画評論家)
 - ⑩スペシャル採録「映画『パピヨン』特別先行上映イベント at 東劇 ライムスター宇多丸『パピヨン』を語る」聞き手・進行：山本和宏氏(ライトスタッフ)
- が収録されているので、その一つ一つを熟読したい。

そこで、私がとりわけ注目したのが、⑨「脱獄映画の系譜」だ。「脱獄映画の源流を探れば、アレクサンドル・デュマの小説『モンテ・クリスト伯』(1844～46)にたどり着く。」から始まる同コラムでは、私が観た「脱獄モノ」だけでも、『脱走特急』(65年)、『勝利への脱出』(81年)、『アルトカラズからの脱出』(79年)、『ランボー／怒りの脱出』(85年)等多くの作品が紹介されている。

そのどれをベスト1に選ぶかは、人によって、また世代によって違うだろうが、去る1月26日に76歳を迎えた団塊世代の私にとって、ベスト1の「脱獄モノ」は、『大脱走』(63年)と『パピヨン』だ。

■□■昭和は遠くなりにつけり！そんな視点で2人の俳優を対比■□■

そこで興味深いのは、その両作とも『拳銃無宿』(58～61年)や『荒野の七人』(60年)等のガンマン姿がよく似合っていたタフガイ、スティーヴ・マックィーンが主演していることだ。もっとも、両作は共に「実録モノ」の「脱獄モノ」だが、『大脱走』はオールスタ

一の共演だったから、スティーヴ・マックイーンの出番は多くはなかった。しかし、それでも興味深い共通点は、彼は何度失敗しても脱獄を繰り返すしつこい男だったということだ。つまりスティーヴ・マックイーンは一度決めたら諦めず、とことん我が道を突き進む男の役がよく似合うということだ。

そう考えると、いたいた日本にも、そんな俳優が！それは高倉健だ。彼は『網走番外地』（65 年）をはじめとする「任侠モノ」「ヤクザもの」で一躍有名スターになったものの、その後同じパターンのヤクザ映画の大量生産に嫌気がさし、大きく悩んだ結果、大きな転換を遂げた。それはスティーヴ・マックイーンも同じだ。「男は黙って・・・」のコマーシャルが大当たりしたのは三船敏郎だが、高倉健も間違いなくそのタイプだ。『昭和残侠伝』シリーズや『網走番外地』シリーズでもそうだったが、とりわけ高倉健の後半生からの名作『八甲田山』（77 年）、『幸福の黄色いハンカチ』（77 年）、『動乱』（80 年）、『駅 STATION』（81 年）、『海峡』（82 年）、『夜叉』（85 年）、『鉄道員』（99 年）、『ホテル』（01 年）（『シネマ 2』34 頁）、『単騎、千里を走る。』（05 年）（『シネマ 17』233 頁）等で彼が演じたキャラのすべては、「男は黙って・・・」で共通している。

2025 年は昭和 100 年の節目の年にあたるから、「昭和は遠くなりにはけり」の論調でさまざまな論稿が発表されているが、私は映画評論家の端くれとして、本作のような 1970 年代の名作を 50 年ぶりに再鑑賞して、「昭和は遠くなりにはけり」を実感している。そんな感慨と共に、ハリウッドの名優、スティーヴ・マックイーンと日本の名優、高倉健との間のそんな共通点を発見するのも一興だ。

■□■45年ぶりに復活した『パピオン』（17年）の評価は？■□■

私はダルトン・トランポが脚本を書いた「バディもの」の最高傑作と言われている、スティーヴ・マックイーンとダスティン・ホフマンが共演した『パピオン』（73 年）が 45 年ぶりに復活（リメイク）されたことにビックリ！それが、チャーリー・ハナムとラミ・マレックが共演したマイケル・ノア監督の『パピオン』（17 年）（『シネマ 45』127 頁）だ。

私を含めて誰もが「73 年版の復活はムリ」と思ったのは当然だが、意外に同作の評価は高かった。それについては、スティーヴ・マックイーン×ダスティン・ホフマンとは全く違う、チャーリー・ハナム×ラミ・マレックという 2 人の俳優の演技力が大きく寄与していることは間違いないが、73 年版とは違う興味深い視点もチラホラと……。もちろん、73 年版を上回るのは不可能だが、73 年版の鑑賞を契機に、そのリメイク版（17 年）も是非一緒に鑑賞したい。

2025（令和 7）年 2 月 4 日記